

中学生区分 愛知県入賞作品

「ぼくは無敵なおばあちゃん」

岡崎市立東海中学校 二年

やまもと りょうた
山本 涼太

ぼくのおばあちゃんは頭の病気をして体にまひがあり施設にいる。一緒に暮らしてはいないが喜びをわかちあえたり、楽しいことは同じである。

二月の頃だった。総理が

「緊急事態宣言を各県に要請した。」

この言葉を聞きはじめはピンとこなかった。この日たまたま母がおばあちゃんの施設に面会へ行ったところ、面会禁止が決定され玄関から中へ入ることができなかったと聞きたとえようの無い不安な気持ちになった。

テレビではひっきりなしに休業要請のことをやっていた。母にこれからどうなってしまうのかを聞いても返事がなかった。

会いたい時、時間が合えばすぐ行ける場所なのに会えないと言われて僕はどうしたらおばあちゃんと交流をとれるだろうと考えた。

妹と協力して色紙にメッセージを書いた。おばあちゃんが喜ぶ顔を想像しながら折り紙を折ったりした。いつ会えるようになるか分からないからとにかく今できることをやった。

しばらくして施設から連絡があり、

「窓越しの面会ならできます。」

と言われ、急いで予約を取った。心の中ではガッツポーズをしている自分が居た。

いよいよ面会の日、何だか緊張した。何を話そう、一言目はどうしようか、行く前におばあちゃんがやっていた実業団バレーチームのことを調べたのでその話にしようか。頭がごちゃごちゃしてるうちに車イスをひかれておばあちゃんが来た。久々に会えた時の顔は想像していた笑顔ではなくて泣き顔だった。うれし泣きなんだろうか、今にも涙がこぼれそうな顔をしてこちらを見るので何を話していいのか頭が真っ白になってしまった。

僕たちの作った色紙を見せた。窓越しな上にその

窓からも何メートルもはなれているのにおばあちゃんは何度も手でマルをつくってくれた。声はほとんど聞こえなかったけれど、おばあちゃんのマルを作っている手からは力を感じた。僕はがんばらなければと強い気持ちを持った。

窓越しの面会からもう半年も経っている。未だに直接会えていない。

今も時々会いに行くけどおばあちゃん以外の人までニコニコしてくれる。手を振ってくる人も増えた。窓が閉まっているからか開けてくれようとする人もいた。

「家族ではないけど二人を見てみんな元気になってくれてるね。」

と母が言った。

その言葉が嬉しかった。最近のニュースでは家庭内のトラブルで事件が起きてしまっているのを時々目にする。心のさみしきは体調にも影響すると思う。

新型コロナウイルスで世の中めっちゃくちゃになり、未だ混乱している失ったものはたくさんある。おばあちゃんとの時間をうばわれた。僕の楽しいこと。不安なこと。逆におばあちゃんの思うこと。一緒に笑うことができなくなってしまった。

会えなくなつて改めて色々考えた。まわりのおばあちゃんとは違う。一緒に出かけることも自由にできない、車イスに乗り体が不自由だけど僕にとっては大切な存在。大きな病気をしてもがんばって生きてくれていつもおうえんしてくれる。会うといつも、「がんばれ。」

とずっと言ってくれる。おばあちゃんが生きていてくれることにありがたうの気持ちを込めて、おばあちゃんの大好きだった習字で

「感謝」

という言葉を送った。

これからも無敵なおばあちゃんであって欲しい。